



Title	インドネシア華人の談話にみられるコードスイッチング：参加者の立場設定に注目して
Author(s)	中谷，潤子
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集. 2006, 10, p. 21-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インドネシア華人の談話にみられるコードスイッチング

ー 参加者の立場設定に注目してー

中谷 潤子*

要 旨

本稿は、インドネシア華人の家族の日常の談話でのコードスイッチング（以下CS）を相互作用の社会言語学の枠組で分析した。筆者は、彼らの談話でのCSの様相を明らかにするためにコードを操る参加者の立場設定(alignment)とその変化に注目した。分析により、コードを切り換える「場」が予め決まっているとは限らず、その都度「いま、ここ」での相互作用で構築される文脈と参加者の要素によって起こり得ることが明らかになった。これはCSのスタイルが普遍的なもの、またはあるコミュニティに共通なパターンがあるものとしてきた先行研究にはない見解である。本稿は、ますます複雑化していく多言語社会を検証するために、「参加者」を軸とした総合的な談話構造研究としてのCS研究の必要性を示唆するものである。

【キーワード】インドネシア華人、コードスイッチング、参加者、立場設定、相互作用

1 はじめに

300を超える民族と言語があるインドネシアでは、ジャワ語、バリ語などそれぞれの民族固有の言語があり、共通語としてインドネシア語が使われてきた。その中で、インドネシア華人¹には、1945年インドネシア共和国成立時よりインドネシア国籍取得が奨励され、1966年スハルト政権成立以後、華人をインドネシア国民として吸収する政策により、公のマンダリン²教育が禁止されてきた。しかし1998年のスハルト政権崩壊後、学校の選択科目としてのマンダリン教育が認められ、現在ではマンダリンを学ぶ華人子弟も再び増えてきた。このような背景のもと現在華人たちが使用する言語は、インドネシア語、インドネシア地方語³、マンダリン、中国地方語⁴など様々である。各々母語とする言語も異なり、各言語に対する能力にも個人差がある。

従って、実際の彼らの談話にはいくつもの言語が使われている。相手によって言語を使い分けているのはもちろん、同じ相手との談話の中でも言語が切り換わ

り、CSが盛んに起こっている。彼らが日常的に交わすやりとりでは、一体何が起きているのだろうか。多様なコードの切り換えは、どのような意味を持ち、参加者はそれをどう捉えているのであろうか。本稿は、従来のCS研究では説明のつかないインドネシア華人のCSについて、参加者に注目し談話の相互作用から分析する。

2 先行研究と本研究の位置づけ

2-1 インドネシア華人の言語使用についての先行研究

インドネシア華人の言語使用に関する研究は多くない。Dede Oetomo(1984)は、ジャワ東部の Pasuruan という町の華人の言語使用について参与観察を中心に調査した。Dede Oetomoはコミュニティ全体を見て、クラス(社会階層)アイデンティティも含めた言語使用と態度についての関連を明らかにすることを目的とした。そうして、各言語の使い分けの様相と“Chinese identity”の呈示としての中国語⁵の使用について言及する。華人は祖先の出身地に関わらず、

* 大阪大学留学生センター謝金講師、大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

出身地別華人でも最も人口が多い福建地方の福建語を、アイデンティティを示すコードとして共有していると言う。談話データは、主に音韻変異や統語構造の分析に使用されており、相互作用として談話そのものをとらえるという方法はとられていない。

松尾(2003)では、インドネシア華人の言語使用の実態が統計的手法によって明らかにされている。そのために、アンケートを首都ジャカルタ、スマトラ島メダン、中部ジャワの古都ジョグジャカルタで計341部回収した。そして、①「インドネシア華人社会における言語選択の実態」、②「インドネシア華人がある言語使用領域で何語を選択しているのか」を実証し、③「インドネシア華人の言語選択、言語シフトに影響を与えている要因」について考察した。アンケートは、話者が「話しかける」ときの言語を相手別に答えるもので一方向の選択しか捉えられないが、実際の談話は相互作用であり、相手とのやりとりの中でコード(言語)が換わることがあると思われる。そこで、インドネシア華人の言語使用を実際の談話から分析することの意義は決して小さいものではないと考える。

2-2 CSについての先行研究

Blom&Gumperz(1972)、Gumperz(1982)によると、ノルウェーのある町には日常会話で使われる Low variety と公的な場面で使われる High variety の2つの言語変種がある。この町の住人はコミュニティ内部での日常会話か、公的な場面かという状況によって変種を使い分けており、この状態を「状況的切り換え(situational code-switching)」という。しかし、この町の役所でのやりとりでは、公的な客とのやりとりでも挨拶や家族の話題になると、High variety から Low variety へ切り換わる。このように住民が、変種の選択規範にのっとって操る巧みな切り換えを、「象徴的切り換え(Metaphorical code-switching)」という。そして Gumperz(1982)によると、2つの違った文法体系や副体系をもつ一節が交換され同じスピーチ内で並記されることを「会話での切り換え(Conversational code-switching)」と定義する。このようなバイリンガルの2つのコードの使い分けは、

民族特有の少数言語を“we code”としグループ内でのインフォーマルな行動にふさわしいものと捉え、多数派の言語はグループ外とのよりフォーマルで堅い関係にふさわしい“they code”と捉えることができるという。

Myers-Scotton(1993)の Markedness Modelとは、マルチリンガルな人たちの相互作用において、言語選択はアイデンティティの「表示(indexes)」だとする。

“Markedness”とは、言語選択自体が予想されたもの(unmarked)か予想されなかったもの(marked)なのかを指す。

最後に、Auer(1988)の言語選択の連鎖分析(Sequential analysis of language choice)について触れたい。Auerの研究は、GumperzによるCSの機能分類への批判的視点が元になっている。会話分析を使用し、CSを文脈化の手がかり(contextualization cues; 後述)として効果的に分析することを提案したものである。

2-3 本研究の位置づけ

本研究は、インドネシア華人の家族の日常の談話でのCSをとりあげる。先行研究などからもインドネシア華人は、公の場ではインドネシア語、家庭内や私的な場面では中国語を使用する傾向があるとされてきたが、筆者の観察では、実際には同じ場面で同じ相手と同じ話題について交わされているやりとりの中でも、いくつもの言語が混在している。また、同じインドネシア華人でも世代、教育や家庭環境によって各々の使用言語に差がある。そこで、世代差があり関係の近い相手である家族の談話を対象として分析を行う。

また、CSの先行研究は、2つの言語をほぼ同等に操れるバイリンガル社会での2言語間のスイッチが中心である。しかし、現実には2言語のみではなく、3言語以上が使われている社会も多い。また、使用言語について参与者の言語能力が同等でないことも珍しくない。そこで、本研究で母語がばらばらな3人以上が日常生活で交わしている談話を扱うことは、現在の多言語社会の実態を捉えるものとして意味があると考えられる。その際、本研究では談話そのものからのCS

の分析を試みるものとして、参加者の相互作用に視点をおくことにする。インドネシア華人の言語を扱った研究で、談話を相互作用として分析したものは管見では見当たらない。談話データを呈示している研究も、その特徴を示しているのみである。

尚、本稿では分析の結果の中でも、特に参加者の相互作用によるCSをとりあげ、話し手のアイデンティティの呈示としてのCSや、CS以外からみられる参加者の立場設定のシフトなどについては、稿を改めることにする。

3 分析の枠組

3-1 相互作用の社会言語学 (Interactional Sociolinguistics)

本研究では、相互作用からCSを捉えていくことにし、そのために「相互作用の社会言語学 (interactional sociolinguistics)」の枠組で分析を行う。

Gumperz(1982)は、社会的相互作用場面そのものを直接データとして収集し、データをそのまま呈示しながら分析を加えてゆく、所謂エスノメソドロジスト (ethnomethodologists)⁶の方法論を受けついで相互作用の社会言語学を創設した。この特徴は、言語の分析に人間関係の要素を直接持ち込むことである。リアルタイムにおける意味伝達のプロセスとしてのコミュニケーションで、話し手や聞き手は重要な文脈化の手がかりとしての役割を果たしており、相互解釈的活動として機能を発するものとして位置づけられ、それを通して社会や人間関係のあり方を捉えようとしている。

Goffman(1967,1974,1981)は、聞き手の推測という局面も文脈の前提として重要だと述べ、それはGumperzの話し手の推測への焦点を補うものとなる。

3-1-1 文脈化の手がかり (Contextualization cues: Gumperz 1982)

Gumperz(1982)によると、与えられた発話の解釈を決定する際に重要になるのが「文脈化の手がかり (contextualization cues)」である。文脈化の手がかりとは、参加者のお互いの方向づけのシグナルである。

その手がかり(cues)はコード、方言、スタイルの切り換えのプロセスやプロソディだけでなく、語彙的統語構造的選択、慣用表現、会話の開始と終結、連鎖のストラテジーも全て文脈化する機能を持っているといえる。文脈化の手がかりの意味は含意的なものであり、参加者の暗黙の気づきによって価値を持つ。

3-1-2 Goffmanの参加者の概念 (Goffman1981)

談話の参加者は従来「話し手」と「聞き手」に二分されてきた。しかし、Goffman(1981)は、談話が行われている場面には、「話し手」にも「聞き手」にもそれぞれの地位(status)があり、これまでの分類ではあまりにも単純化しすぎていると考えた。そこで、話し手の地位にはトークを創造する者としての「オーサー (author)」、トークを発する者としての「アニメーター (animator)」、トークへの責任者「プリンシパル (principal)」があり、この3つを発話の「産出フォーマット (production format)」とし、更にもうひとつトークに登場する者としての「フィギア (figure)」を加えて、話し手を4つに分類した。

続いて聞き手を、参加を承認された参加者 (ratified participants) と参加を承認されていない参加者 (unratified participants) の二つに分け、それぞれを以下のように下位分類した。

1. 参加を承認された参加者 (ratified participants):
 - a) 「指定された受け手 (addressed recipients)」
 - b) 「指定されていない受け手 (unaddressed recipients)」
2. 参加を承認されていない参加者 (unratified participants):
 - a) 「話し手に存在が知られている聞き手 (bystander)」
 - b) 「話し手に存在が知られていない聞き手」:
 - ・「会話を偶然耳にしてしまう聞き手 (overhearer)」
 - ・「盗み聞きする聞き手 (eavesdropper)」

このように分類された聞き手の地位から構成されるのが、「参加枠組 (participation frameworks)」である。

3-2 ターンテイキング (Turn-taking: Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)

Sacksに代表される会話分析は、エスノメソドロジー

と呼ばれる社会学の流れを組むものである。しかし、その中のターンテイキングシステムが本研究の談話での相互作用をとらえるのに援用できるものとする。会話分析の基本的な概念は、まず会話の基本的な単位をターンとすることである。この単位は、「ターン構成単位(turn-constructual units:以下TCU)」と呼ばれ、文、節、句などによって構成される。Sacks, Schegloff&Jefferson(1974)によると、会話参加者が、話す、止める、次の参加者が話す、止めるという適切なTCUの移行を「ターンテイキング」という。またこのTCUの区切れ目で話者が交替するであろうところを「移行適切場(transition relevance place:以下TRP)」という。

4 調査

4-1 対象

本研究は、ジャカルタに住む客家系のインドネシア華人の協力者Kay(仮名)⁷を核とし、Kayとその生活に関わりを持った全ての華人を対象として調査を行った。

Kayは48歳の女性で日本語学校を経営している。Kayの母語はインドネシア語だが、家庭内ではマンダリン(と一部客家語)で育ち、高等教育を英語で受け日本へ留学した経験もあるので、マンダリンと英語と日本語もできる。Kayは、華人系の小学校に通ってマンダリンで教育を受けていたのだが、1965年に初代大統領スカルノが失脚した後華人系の学校が閉鎖されたため、小学校3年からインドネシア語で教育を行う学校に転校したようだ。

4-2 データ収集

2004年3月に3週間、インドネシアのジャカルタにて協力者Kayの生活に密着し、その行動を追った。そしてKayの生活の中で、インドネシア語のみのモノリンガルではなく複数のコード(言語)が選択される場面を割り出し、その場面については談話をMDに録音した。録音に際しては、できるだけ自然な状態で録音したかったので意図的な状況の設定はせず、必要だと思われた時にはその場で許可を取って、マイクを参

与者達の中央にセットするか中心的な話し手(主にKay)につけてもらった。従って、ビデオによる録画も行っていない。調査期間中、録音を行う場面が何度かあったことと、マイクをできるだけ目立たないようにセットしたこと、そして調査者(筆者)と協力者がもともとよく知っていた関係だったこともあって、録音されていることに対してはあまり意識していなかったようだ(Kayの後日談より)。筆者(談話内ではJとする)は全てのデータ収集場面において、完全な参加者の立場を取っている。状況のコントロールを避けようとする、既知の関係である筆者が完全な傍観者となることは難しかったこともある。

収集された談話データと参加者の言語使用に関する特徴は以下のとおりである。

・ 談話データ：

- ①[朝食]Kay、夫E、娘N、筆者Jの朝食場面:約30分
 - ②[車中]Kay、夫Eと娘Nと筆者Jと移動中の車の中で:約30分
 - ③[夕食]Kay、夫E、娘N、両親KM、KP、弟D一家と筆者のレストランでの夕食:約60分
 - ④[両親宅]Kayが筆者Jを伴って両親KM、KP宅を訪問し、雑談: 66分
- *本稿では、データ②③④を使用。

表1 参加者の言語使用に関する特徴

Kay	[K] 48歳	イ◎マ◎日◎英◎客家語○広東語× 娘にはマンダリン、夫にはインドネシア語。
夫 Eddy	[E] 48歳	イ◎マ△日△英△客家語×広東語× 広東系。Kと結婚後マンダリンと日本語に触れる。
娘 Non	[N] 16歳	イ◎マ◎日◎英◎客家語×広東語× 祖父母、母とはマンダリン。教授言語が英語の外国資本の高校に通う。
Kayの母親	[KM] 78歳	イ◎マ◎日×英△客家語◎広東語× 教師一家に育ったため、家庭内でもマンダリンで育った。
Kayの父親	[KP] 78歳	イ◎マ◎日×英○客家語◎広東語× 母語はマンダリンと客家語。
Kayの弟 Donny	[D] 40歳	イ◎マ×日×英△客家語○広東語× 海外経験なし。幼い頃は母親に客家語で話しかけられてきた。
筆者	[J] 30代	イ◎マ◎日◎英○客家語×広東語× 日本語母語話者。インドネシア語とマンダリンができる。

* 表中のイ:インドネシア語、マ:マンダリン、日:日本語、英:英語、その他は中国地方語。

* 言語能力について、◎全く不自由なし、○日常会話程度、△極簡単な日常会話程度、×ほとんど不可に分けた。しかし、これは客観的基準に基づくものではなく、あくまでも談話データを読み解く場合の参考として、会話能力のみについて記したものである。

5 参与者への配慮としてのCSに関する分析

5、6、7の分析では、特に参与者を軸として、参与者が談話内でどのような立場設定であったり、どうふるまおうとしたかという点とCSとの関連を見る。

まず5では、談話が誤解なく進み参与者同士が協働で談話を構築する仲間だという意識を持てるように、話し手から他の参与者へ行う気配りや手助けなどを「配慮(consideration)」とし、配慮のひとつとしてCSを捉えた。

ここでは、Goffman(1981)の参与枠組を用い、「参加を承認された参与者」である5-1「指定された受け手」と5-2「指定されていない受け手」に対して、談話内のコードがどう作用しているのかを分析した。加えて5-3では、「参加を承認された参与者」全てを仲間とする意識の呈示が見られたコード選択を扱う。

5-1 指定された受け手 (addressed recipients) への配慮

5-1-1 言い直しにおけるCS

Tannen(1989)によると、談話で同じことを2回言うのは「意味の再確認」の機能がある。またその際には、リズムパターンやサウンドなどの音楽的效果も影響する。本項では、その音楽的效果に代わるものとして、CSが意味の再確認に効果をあげるのではないかと予測し、実際の談話の言い直しの例を挙げて以下に分析する。

*談話の文字化の方法については文末を参照。

5-1-1-1 言語能力の見積もり

(1)両親宅<<KMはJの母親の年齢を聞いている>>

409J: あ、sudah. 五十八 (一もう 58)

410K: 五十八岁 (58歳)

411KM: 五十八 (58)

412J: Oh, baru hari ini 五十八(九) ya.
(お一、今日 59 になったばかり)

413K: Eh : : : ? (ええ?)

414KM: 五十八? (58?)

415J: Ya. (はい)

416KM: 五十九 我是七十八 (59(歳)。私は 78)

417J: Nnn? (ん?)

→418KM: 七十八 (78)

419J: hhh{自分のほほを手でなでながら}
[halus] (つるつる)

→420KM: [seventy] (0.5).seventy eight. (70, 78)

416KMの後、417Jが聞き返しKMはもう一度繰り返す。それに対して419Jが発話するが、ため息が次の発話までの間を作ったことから、420KMが英語で「78」と言う。419Jと420KMの重複からも、KMがJの発話を待たずに英語で繰り返した様子がわかる。KMはJの反応がないので、英語で言い直したのであろう。KMがJを「マンダリンがわからない」と捉え、英語でコミュニケーションをとろうとしたことがわかる。

インドネシアでは、Jのような外国人でなくても使用言語はまちまちである。華人同士でも相手の使用言語を確認しあってから話すわけでもない。年齢や出身地などがわかれば、それで適当に推し量って使用する。従って(1)のように反応を見て、相手の言語能力を見積もり(assessment)^a、CSで繰り返しながらコミュニケーションをスムーズに進めるということが日常に起こっている。

5-1-1-2 同意

(2)両親宅<<KMがJの家族について色々尋ねている>>

556KM: 妹妹结婚了(.)中间的itu 还做那个工作.Sih J 你
在那边也是做

(妹は結婚して、真ん中の(妹)は、
まだその仕事をしている。J、あなたも
[xxxxxxxxxxxxxxxxx] あっちは、)

557 K: [J、走来走去(h)(h)]

(Jはあっちこっち行ったり来たり。)

£Pokoknya urusannya 走来走去

(とにかくあっちこっち行くのが仕事)

→558J: Nggak bisa diam. (じっとしてられないの)

559K: (h)(h)(h)(h)(h)(h)(h)

557Kの「走来走去(あっちこっち行ったり来たり)」に、558Jがインドネシア語で「じっとしてられないの」と言っている。直訳すると少し違うが同義だと考えられる。Jは自分の言葉で言い直すことで、意味を再確認して同意を表明しているのではないだろうか。自分の言葉とは、母語ということではない。Goffman (1981)の発話の産出フォーマットによると、557Kは、オーサーとしてまたアニメーターとして発話し、Jはその中でフィギア(figure: トークに登場するもの)として語られている。しかし558Jが同じ内容をCSして語ること、J自らもまたトークを創造するオーサーとして、語られる者から語る者として談話に参加しているのがわかる。これも、コミュニケーションをスムーズに進めるためのJの受け手(この場合はKもKMも指定された受け手と捉えることができる)への配慮の一つだといえるのではないだろうか。

5-1-1-3 心的距離の表明

(3)両親宅<<Jの持参したお土産をKMに渡そうと

JとKが二人で話しているところ>>

349K: でも(0.5)包装紙がきれいです。(.)

[£私なら: (h)開け]ない。

350J: [Tapi(.)見てみて.] (でも一)

351K: (h)(h)(h)(h)(h)(h)(h)

352J: (h)(h)

→353K: £もったいないから。(.)Idih bagus ya.Emang benar⁹. (0.5)ほんとにきれいですよ。

(うわあ、きれいね。確かにほんとに。)

[Jちゃん.]

354J: [これは多分]何か字、字ですよ。

355K: Nh? (ん?)

(中略)

<<KMが呼ばれて台所から来、Jに土産を渡される>>

382K: Ini,mami¹⁰Mamanya sih J yang bikin.

(これ、ママ!Jのママが作ったの)

383J: すみません。

384K: (1)Bikin loh,(0.5)yang pakai(.)kembang

asli. (作ったのよ。生花を使って)

→385KM:(.)° きれい°

386K: [(h)(h)(h)(h)(h)(h)(h)]

387J: [(h)(h)(h)(h)(h)(h)(h)]

→388KM:舌打ちの音¹¹° 漂亮° (きれい)

KもKMもお土産を見て「きれいだ」と感情を表現するところで、同じことを2度、コードを換えて言っている。そのコードは、Kの場合、自分の母語→相手の母語であり、KMは相手の母語→自分の母語である。KMは日本語ができるわけではなく、Jは385KMではじめてKMの日本語を聞いた。従って、385KMのコードの選択はかなり意図的であったことがわかる。Kのほうは、逆に自分の母語で出てしまったのをあえてJの母語に言い直していると考えられる。これは、353Kがはじめに‘idih’ (「うわあ」に相当する感動詞)と言っていることから判断できる。

Jがインドネシア語とマンダリンができることは、KもKMも知っている。つまり、KもKMもJがインドネシア語やマンダリンができようができまいが、自らが日本語を選択して使用したということである。それは、お土産への感謝、いわば相手に感情的に近づきたい、あるいは近づいたということを表明するために相手の母語を選択したと考えられる。Gumperz(1982)の、“we code”と“they code”という捉え方を参照して考えてみよう。一般に、we codeからthey codeへのCSは不快感を表し、they codeからwe codeへのCSは親しみの気持ちを表す場合が多いという。インドネシア華人の場合は、継承されてきた中国語もその能力も人によって異なり、このコードの二分が完全に当てはまるとはいえない。しかし、CSが心的距離をあらわすという見解は応用できると考える。KやKMにとって外国語であるJの母語を選択することで、Jへの心的距離を縮めようとしている。つまり、we

code や they code は継続的なコードなのではなく、当該の「いま、ここ」における相互作用によって選択されたものだと考える。むしろ、このやりとりにおいては、日本語が“we code”なのである。

5-1-2 話題転換の呈示としてのCS

Auer(1988)の「談話に関するCS (discourse-related code-switching)」に、話題転換の際のCSがあげられている。本項では、トピックが切り換わる時にCSが起こったことを、参加者の意図的なストラテジーだと考えて見ていきたい。

尚、参加者によって母語や言語能力に差があるので、単に話しやすい言語で話した場合なのか区別がつかないものは扱わない。同じ話し手が、明らかにトピックが換わる時に突然別のコードを選択し直している場合を話題転換の呈示のCSとする。

(4)両親宅 <<日本でも蟻が部屋の中に入ってくることもあるという話題から>>

296J: Nh.mn.(3) {飲み物を飲み込む音} (うん)

Cuman juga ada.

(ただ、(日本にも)ありますよ)

時々わからないけども食べ物(が)置いて、

まあ、ケーキとかそのまま置いてたら↑↓

° 蟻が来るということ°

297K: Nh : : : (んん)

298J: 夏ですよ、でも

299K: Nh : : : (んん)

300J: [一年中では]

301K: [ここは年中] 暑いですから : =

302J: ん : :

303K: =夏ですよ、年中夏° ですから° :

304J: ん : :

→305K: {J 持参のお土産を指して}

Ini kasih lihat dulu : ,J ちゃん.

(これまず、見せてあげましょう)

306J: OH,ya,ya : .() (おお、そうそう)

お母さんはもう、遠慮してそのまま置いてしま
って、

KとJは部屋に侵入している蟻を見ながら、日本で
の状況を話している。しかし、305Kがお土産をまだ
KMに見せていないことに話題を換える際に、インド
ネシア語を使う。日本語のみでの談話の場合、一般的
に話題を換えるときはどのように言うだろうか。「と
ころで」「そういえば」などの接続詞の場違いのマー
カー(displacement marker ; 山田1999)、または、
「あの一」「ねえ」などのフィラーがあつて、新たなト
ピックが始まるのではないだろうか。西阪(1999)では、
「新たな話題が導入される時、しばしばその発言は
「あの一」によって有標化される(83)」ことを分析し
ている。しかし(4)では、話題転換の際、フィラーな
しでインドネシア語にCSし、別のトピックが始まっ
ている。そこで、CS自体が話題を有標化するための
フィラーと同じ役割を果たしている可能性があると考え
える。

つまりこのように、CSによってつなぎ言葉を必要
とせず別の話題に入っていけるケースから、CSによ
り話し手は新たな話題を有標化し、受け手は新たな話
題に換わったことを知り、コミュニケーションがスム
ーズに続けられることがわかった。

5-2 指定されていない受け手 (unaddressed recipients) への配慮

5-2-1 結束性を高めるCS

(5)両親宅<<KMが中国人(インドネシア華人)は息子
を生まなければ責められるという話を
する>>

722KM: Oh, 我们中国人那里, 没有生男孩子,Kay,好
像婆婆,Fangpo yao i qun rai a.{客家語}

(私たち中国人は、息子がいないと、ケイ、お
ばあさんみたいに「お手伝いさんでも男
の子を産むよ」って)

→723K: あれ : ?すごいね : [ひどいね :]

724KM: [Gitu 这里的].

(そうよ、ここの人)

725J: Nn? [お手伝いさんでも、]いいから (ん?—)

726KM: [就是这样子。] (こんなだから)

727K: お手伝いさんでさえ、男の子を産むから

728J: あゝ、産め

729KM: 很不好 (本当によくない)

722KMはマンダリンで話し、直接引用の箇所では客家語へのCSが起きている。その前の‘Kay’という呼びかけからもわかるように、直接引用はKのおばあさんの話をしている。しかし、723Kの発話は日本語である。722KMの発話をJが理解していなかったことは725Jからもわかるが、Jは客家語が理解できないということは、Kも知っていることである。そこで723Kの発話は、KMやJに話しかけたとはいえないKの感情表現であると考えられる。

Kにとって日本語は母語ではないが、使用言語のひとつとして役割を持っているようだ。(5)の例では、KはJと直接やりとりはしていないが、感情的な表現で日本語を選択している。Goffman(1981)によると、感情の表現はしばしば相手に聞かせるために用いられるという。(5)の状況においてJは参加を承認された参与者であった。Kの日本語での感情表現は、参与者にJがいたからである可能性が高い。指定されていない受け手であるJへの配慮が、5-1-1-3心的距離の表明と同様、日本語へのCSに表れたのではないかと思われる。

5-2-2 直接対話の回避

(6)両親宅 <<KとJに食べ物をもてるKM>>

1KM: Mamiyang 炒的面要吗?

(ママが炒めたそば、食べる?)

2 K: [炒面] [炒面] [ね:]

(焼きそば、焼きそば)

→3J: [Tapi] kan(.)[お腹いっぱいです]よ。]

(h)(h)(h)(h) (でも、—)

4K: [Sudah kunyang,sudah kunyang.](h)(h)

(お腹一杯、お腹一杯)

5 J: [Oh,Kalau tahu,(.)>tadi nggak makan dong]

<tadi ↑. (ああ、知ってたら、さっき

食べなかったのに、さっき)

6K: ね:::

7KM: 带回去? (持って帰る?)

8K: (.)Nggak. yang 带回去 tu ayam aja,ayam panggang yang ° xxx °.

(ううん、持って帰るのは

あの鶏にする。鶏を焼いたの…)

1 KMは、KとJの両方に話しかけている。Jはお腹が一杯なので、KMが勧める焼きそばを食べることができない。しかし、それを直接KMに言わずKに言う。日本語がわかるのはKだけなので、日本語に切り換えたことで、Jによって指定された受け手は、KMではなくてKにシフトする。そして4 KがKMにインドネシア語で伝える。同時に5 J自身もインドネシア語でやりとりに加わる。5 Jを見ると、インドネシア語がわからなかったわけではないことは明らかである。つまりここでは、「お腹が一杯だ」と直接KMに言うことを回避し、5 Jでの言い訳だけをインドネシア語で言っているのがわかる。

つまりJは、断る時や相手に対して失礼になるかもしれない時は、直接言わないでわざとKMにわからないコードを選んでいる。Li Wei(1994)では、隣接対(adjacency pair)¹²において、好ましい応答(preferred)である場合は質問者と同じコードを選択し、好ましくない応答(dispreferred)¹³の場合は質問者とは別のコードを選択している例を紹介している。Li Weiの研究はどちらの言語も受け手が理解できる中での選択である。ここでは、参与者の言語能力が異なることを利用して「相手にとって好ましくないであろう応答は、相手が理解できないコードを選択」していることがわかる。また、直接の対話を回避しKがアニメーターとして媒介したことで、Kにクッションの役割を託すという配慮を見せることもできる。

5-2-3 分離としてのCS

コードの中でも、マンダリンや中国地方語はプリブミ¹⁴には理解できないので、プリブミの前でプリブミに関する話をする時に中国語が選択されることは珍しくない。

(7)夕食 <<レストランで皆が注文し終わったとき>>

149KP: Donny,Donny,Donny. (ドニー、ドニー、ドニー)

150KM 看看(老伯伯) (お爺さんの方を見てよ)

→151KP: Donny. 你的用人吃了没有?

(ドニー、お手伝いは、もう食べたの?)

152D: [Ha?] (は?)

153K: [(h)(h))(h)(h)

→154KP: 你的用人吃了没有?

(お手伝いは、もう食べたの?)

155D: (用人)? Ya,u : dah makan.Nggak usah.

(お手伝い?うん、もう食べた。必要ないよ)

インドネシアでは子供がいる家庭は、その世話をするお手伝いさんやベビーシッターを雇っているところが多い。彼女らは外食先で家族と同じ物を食べることはない。そして親が食べている間、子供の食事の面倒を見る。ここでは、Dが連れてきたベビーシッターが食事を済ませてきたかどうかを、KPがベビーシッター本人に聞かれないようにDにマンダリンで尋ねている。普段KPとDとはインドネシア語で話している。従って、ここではKPが意図的にマンダリンを選択していることがわかる。これもベビーシッターが直接耳にして、気を悪くするのを避けようという配慮だといえるだろう。Donnyは発話全てをコードを換えて行っているわけではない。部分CSで、理解につながる決定的な手がかり(cues)を恣意的にはずしている。Gumperz(1982)は文脈化の手がかりが参与者への予測のシグナルになると言っているが、CSは相手の理解を助けるためのものばかりではない。むしろ手がかりを消してしまうことで、余計なことを相手に知らせないように配慮するための行為ともなる。そしてこのCSも、「手がかりを消す」というのも重要な文脈化の手がかりで、それによって受け手は秘密の話だということを知ることができるともいえる。そうして指定された受け手と指定されていない受け手とを分離することになるのである。

5-3 参加を承認された参与者(ratified participants) 全体への配慮

これまで、参与者に応じたCSで、参与者に歩み寄りたり適度に距離を保ったりする配慮が明らかになった。では、「指定された受け手」と「指定されていない受け手」の両方である「参加を承認された参与者」全体に対しては、どのような配慮が見られるのであろうか。本項では、母語や使用言語の異なる参与者全てをひとつの結束した共同体(community)と見ていることが、使用コードによって示されていると思われるケースをとりあげる。

5-3-1 団結を示すCS

(8)両親宅

<<KMはKが料理ができないことを話題にする>>

816K: Bisa. Sekarang bisa ya? Masak ya? Sedikit ya? (できるよ。今はできるね?料理ね?少しね?)

817J: Ya. (うん)

818K: Bisa. (できる)

819J: Ini kali setiap hari masak.(h)(h)(h)
(今回毎日料理してる)

820K: (h)(h)(h).何も作ってくれ、て()あげてないって。

821KM: 我就以为每天带你去吃,外面吃。

(私はてっきり毎日あなたを食べに連れて行っているのかと思った、外食に。)

[不会做得] (料理できない)

→822K: [Tukang 便利] (便利屋さん)

823J: (h)(h)(h)

824K: Bisa Sekarang udah. (できる。今はもう)

825J: Y : a, sekarang masak ya : ↑.Ibu K.

(うん、今は料理してる、ケイさん)

KMに「あなたは料理ができないから、Jを連れて毎日外食しているんだろう」と言われたことに、Kが反論していた発話である。「便利」は日本語、‘tukang’はインドネシア語で「職人」という意味で、直訳は「便利屋」だが、ニュアンスは「便利が好きな職人」つまり「手抜き屋」ぐらいの意味である。もちろんこのような言葉はなく、Kが従来料理嫌いであるのをちょっとした冗談で言い訳しようとした際の

とっさの造語と見られる。文内CSとは異なり、一語が複数のコードで構成されていることから「混合コード」だといえる。

Myers-Scotton(1993)の Markedness model は、言語の選択はアイデンティティと関連のあるものだとしている。同じ民族か仲間かによってCSが起こったり、二つの言語を交互に切り換えながら話したりすることがアイデンティティの表明なのだ。応用して考えると、この「tukang便利」も談話の参与者(K、KM、J)との結びつきの表明ではないかと考える。Jは他の参与者と民族、母語も異なる。インドネシア華人の談話の場合、民族や母語のみで仲間として歩み寄ったり、隔てたりというようにきれいに分けられないからこそ、その談話、談話での当該の交渉において、その都度仲間意識やアイデンティティが構築され、表明されることが考えられる。JとKMを結びつける人物であるKによる双方の言語を混ぜた造語は、このやりとりの参与者という共同体を象徴しているものだといえよう。

6 ターンテイキングとCSに関する分析

3-2で述べたようにターンテイキングシステムは、CSが参与者にとって何を意味するかを見るのに有効なツールであると考え、6ではターンの移行とCSの関係を見る。話し手が次の話し手にターンをつなぐ際に、どのようにCSが起きているのか。そして、直接次の参与者に指定されなくても、ターンを獲得するためにコードを切り換えているケースを紹介する。

6-1 CSによる次話者選択

6-1-1 意図的な受け手のシフト

Auer(1988)の「談話に関するCS (discourse-related code-switching)」には、話者に応じたCSについても指摘されている。

(9)夕食 <<レストランでJは注文したNasi goreng (炒飯)が来て、食べている>>

443D: [(xxxxxxx)]?

444KM: [(这个魚)] (この魚)

445K: Apanya? (何が?)

446D: (Itu makan)? (あれ食べている?)

→447K: Nasi gorengnya enak, dia : : Justru.Cuma saya pikir itu ↑素朴すぎる?

(ナシゴレンがおいしいのよ、彼女は。だから。

ただ私が思うのは、それはー)

448J: Yang mana? (どれが?)

449K: Nasi goreng は? (ナシゴレンは?)

450J: Ini? (これ?)

451K: Nn (んん)

452D: {Kに}(Dianya senang)?

(彼女は喜んでるのか?)

→453K: 'Tanya dong.(.)おいしい' ですか? *

((自分で聞きなさいよ。ー)

454J: (2){手の甲を上にもむけて水平にし目の前で振る
仕種} 还好 (まあまあ)

(9)は、レストランで12名が卓を囲みながら食事をしている。Jは注文したナシゴレン(炒飯)を食べており、Kの弟DはJのナシゴレンがおいしいのかどうか気にする。しかしDは、Jに話しかけずKにあれこれ聞いている。始めJは、Goffman(1981)の発話の産出フォーマットでのフィギアである。承認された受け手ではあるが、ターンを譲る相手とは考えられていない。447Kが、オーサーとしてJについて話している。447Kは後半、ナシゴレンに対して自らの意見を言い始めるが、「素朴すぎる?」と突然日本語に切り換え、Jに尋ねる。Jは日本語へのCSで自分が指定された受け手になったことがわかったが、やりとりを聞いていなかったのか聞き返す。447Kは文内CSであり、日本語に切り換えたからこそ次話者が明確化され、指定された次話者が反応できた。そうでなければ、DやKMと交わっている談話なのだから、皆が理解できるようにJにもインドネシア語で話しかけてもいいはずである。CSによってJを次話者として振り向かせる目的のほうが強く働いたといえるであろう。453Kも同様である。この「おいしいですか」はDの代わりに聞いて

いるので、ここでのKはアニメーターであるといってもよい。

CSによって有標なコードが選択され、「J」などの呼びかけがなくてもCS自体が「非明示的な次話者選択」にあたり、文脈が変化しているのがわかる。

6-1-2 偶発的な受け手のシフト

(10)車中

<<K一家とJが車でKの妹宅へ向かっている>>

106K: Udah panen, 収穫 Non. Ah ha : !

(収穫した、叔母さん、ノン。ああ!)

107N: Panen apa si? (何を収穫したの?)

→108K: Itu diapunya *hydroponics* nya sudah panen,
収穫した。

(あの彼女の水栽培はもう収穫した、ー)

109J: Nnn() (うん)

110K: Udah panen. (もう収穫した)

111J: 残念。

112N: {歌う}

113K: 残念.[Baru kemarin.Saya tanya,aah.]

(昨日だって。私が聞いたら、ああ)

→114J: [Ya,saya juga mau jadi petani.]

(うん、私も農民/収穫する人になりたかった)

115K: [(h)(h)(h)(h)(h)(h)]

116N: [(h)(h)(h)(h)(h)(h)]

Kの妹が自宅で水栽培した野菜を収穫してしまったのをKが残念がっている場面である。この話はJにはすでにしており、106では“Non”という呼びかけもあることから、Nに話しかけていることがわかる。しかし、108で同じことをインドネシア語と日本語で繰り返す。日本語が理解できるのはKとJだけなので、Jは次話者として指定されたと思ったのか相槌を打つ。するとKが、110でもう一度インドネシア語で繰り返す。108KはJを受け手として指定しようとしたものではなかったのかもしれない。しかし、一度指定されたと判断したJは110の次のターンも自分が選択されたものとして、111を日本語で引き継ぐ。113でもう一度Kがターンを獲得するが、まず、111Jの発話を

受けて、同じく日本語で「残念」と同調する。112Nはもうやりとりには加わっていないことがわかる。

113Kの後半と114Jはインドネシア語をコードとして選択している。これは二人とも、Nや夫Eのことを考えて日本語のみのやりとりを避けようとしたのではないかとも思われる。114Jのインドネシア語での冗談で、116Nが反応を示した。Nの「笑い」は、談話への参与を証明するものである。

CSが受け手を指定するケースは、この108Kのように意図的ではなくむしろ偶発的に起こったと考えられるケースもある。つまり参加者は、コードをコントロールすることもあれば、コードに振り回されてしまうこともある。

6-2 従属的コミュニケーションでのCS

Goffman(1981:133-134)は、話題の主流とは別にターンが続いた場合を「従属的コミュニケーション(subordinate communication)」とし、その場の中心を担う話題による「支配的コミュニケーション(dominating communication)」と区別した。またそれが承認された参加者によって起こる場合をバイプレイ(byplay)¹⁶といった。会議で公式に発言したり、発言者の意見を聞いたりしているのが支配的コミュニケーションならば、小声でひそひそことばを交わしているのは従属的コミュニケーションである。従属的コミュニケーションで、支配的コミュニケーションとは別のコードを選択すると、どのような効果が見られるであろうか。

(11)両親宅<<総選挙を前に、支持政党の名刺大のカードを見せながら、政治について語るKP>>

1429J: Ini banyak nama kartu. (これ、ー)

1430KP: [Kalau A(政治家の名前)] (Aの場合は)

→1431K: [ひとつ持ってたらず?]

1432J: Minta satu ya. (一枚くださいね)
{名刺をとる}

1433K: Ah : . (ああ)

1434KP: Kalau B(政治家の名前),tidak. (Bは違う)

1435J: Ah : . (ああ)

- 1436KP: B yang korupsi. (Bが賄賂なんだ)
- 1437K: 嬉しい。Jちゃん(名刺)もらったら。
- 1438J: Ya, banyak korupsi ya, katanya.
(はい、かなりの賄賂だって聞きました)
- 1439KP: Korupsi yang busuk, tidak mau.
(賄賂なんか腐敗だ。嫌だ)
- 1440K: ひとつもらったら嬉しいと思うよ・hhh
- 1441J: (名刺を見ながら) Ini yang apa? Ininya ya?
(これは何? これなの?)
- 1442KP: Ini- (これは、)
- 1443J: Ininya ya? (これなの?)
- 1444KP: Buat DPR. DPR.¹⁷ (議会のため、議会)
- 1445J: Oh (おお)
- 1446K: [議員かな?]
- 1447KP: [Jakarta punya] DPR. (ジャカルタの議会)
- 1448J: Ini partai *nya* top? (これが政党の党首?)
- 1449KP: Nn. (んん)
- 1450J: Haa. (はあ)
- 1451KP: Partai ini, partai ini. (この政党、この政党)
- 1452J: Oh, ya ya ya. (おお、はいはいはい)
- 1453KP: Ini cuma [*(status)*].
(これはただのステイタス)
- 1454K: [大統領かな]
- 1455KP: Ini masing-masing orang punya itu ya ↑.
Ini satu, satu satu buat cuma pegangan.
(これは、それぞれの人がこれを持ってるのね。
これひとつひとつはただの携帯用)
- 1456J: はい、pegangan. (携帯用)

6-2-1 口出し

6-2-1と6-2-2は、上記(11)を参照する。

1429Jは、KPが名刺大の支持政党のカードをたくさん持っているのを見てKにそれを言う。すると1431Kが「一枚もらえば?」という意味のことを言う。1432JはKPに「一枚ください」と言い、名刺をとる。KPは、1430から自分の話を始めかけておりそのまま話しつづけるが、1437KがJに日本語で話しかける。これは、Jが一枚名刺をもらったので1437Kが「Jが興味を示して名刺をもらったので、KPは内心喜んで

いる」と言っているのである。JはそのままKPとのやりとりを続けるが、1440Kは、また同じことを日本語で言う。これは、Gumperz(1982)の「会話での切り換え」の中の *personalization vs objectivization* (主観的なことと客観的な事実との間でのCS)という区別に相当するだろう。政治というKPがあげている公の話題に対して、今日の前にいるKPが喜ぶかどうかという私的な話題に、Kは日本語を用いている。ただ、Gumperzの機能が同じ人の発話の中での切り換えを指すのに対し、ここではK自身が私的な発話を担当する役割を担っている。そこで、KPとJのひとつの公的話題でのやりとりの中に、KとJというもうひとつの私的なやりとりが絡んでくるという構造になっている。それが、日本語というコードが使用されていることによって、会話の主流を妨げることなく合間を狙って口出しをすることが可能なのがわかる。

6-2-2 参与の呈示

1446Kと1454Kには前(次)の発話との「重なり(overlap)」が見られる。つまり、ターンテイキングがスムーズに行われておらず、参加者はKを次話者として選択していなかった可能性が高い。1446Kは、DPRを日本語に訳そうとしている。1454Kの「大統領」は、恐らく話の内容に関して説明しようとしたものと思われる。Jは日本語に訳さなくてもその場のやりとりは理解できていた。すると、Kが自分の日本語学習のために、Jにその日本語を聞いてほしかったとも考えられる。何か聞いたかったのか確認したかった可能性が高いが、発話することによってリスナーシップを表明しているだけかもしれない。いずれも談話内容に積極的に参与することを目的としているというよりは、ただ談話の参加者であろうとしているKの姿が見える。

6-2-1にしても6-2-2にしても、話題の主流とは別のコードを選択していることで、却って談話の流れに埋め込まれず、上手い具合に合いの手のように主流のやりとりのターンとターンの間に入り込んでいるのがわかる。

7 媒介者としての参与とCSに関する分析

Goffman(1981)によると、参与者のうちトークを発するものはアニメーターであり、‘the sounding box from which utterance come (発話が発せられる音声装置:226)’だと述べられている。本節では、データ中に多く見られたアニメーターとしての参与に着目して分析を行いたい。本研究では、参与者の母語がバラバラであり、日本語母語話者であるJが一人参与者として加わっていることが談話に大きく影響を与えている場面が見受けられる。

7-1 通訳 一媒介者による言語能力の見積もり

収集された談話での参与者の共通語は、インドネシア語である。その他のマンダリンや客家語、日本語に関しては参加者によって言語能力に差がある。そこで、聞き手がわからない言語について参与者の通訳が必要な場合がある。しかし、全データのうち通訳を行っているのは全て日本語からか、日本語への通訳であった。つまり普段の家族間の談話では、通訳はほとんど行われないことになる。これは、家族での共通語がインドネシア語であることと、その他の言語が話せないのが誰かがはっきりとしているからであろう。

また、参与者の要求によって行われる通訳は多くなかった。そのときの会話の流れを見ながら、随時媒介者が通訳者になっているのだ。通訳者はその都度参加者の言語能力を見積もり(assessment)ながら、違う言語で言い換え、相手の反応を見る。このようにコミュニケーションがスムーズにいくように非明示的な「交渉(negotiation)」を行っているのである。しかし、見積もりの中でも「通訳」として話者の言葉を伝達するという性質の強い場合と、通訳者がまるで自分の言葉であるかのように話す場合がある。

本研究では通訳するということは、そのために改めて違うコードが選択されるだろうということが前提になっている。従って特にCSのみを重視するのではなく、むしろ媒介者としての参与者の様々なストラテジーに注目したい。

7-1-1 明示的な通訳

通訳者の発話が自分の言葉でなく通訳であることを示すために、伝聞マーカーが用いられる場合がある。それによって、通訳者の立場設定(alignment)がはっきりと示される。

(12)両親宅 <<KMが日本に行ったときの入国審査時の話をしている>>

981KM: Dulu Mami pergi Je(.)pang ↑, sampai disitu ↑, 他问 mami, mami 也不懂 好像你就来了。

(以前、ママが日本へ行ってあっちに着いたら、彼(入管の人)がママに質問して、ママもわからなくて、確かあなたがすぐ来たような)

982K: {(h)(h)(h)(h)(h)}

983KM: 做玩 dari mana. Cukup 会 会讲话

(どこから遊びに来たと十分話したんだけど)

984K: (h)(h)(h)

985KM: 他得用那个会讲 (彼の言ったことは)

→986K: (h)(h)(h)(h). 日本に行った時↓(),

987J: (h)(h)(h)(h).

988K: =いろいろ聞かれては何もわからなくて

989J: (h)(h)(h)(h).

990KM: (愠色) lagi, mami (xxxx)

(怒ってるし、ママは…)

991K: Oh : : .

(おお)

992KM: 不客气.

(失礼だし)

993K: 怖い[怖い] 顔もしてるから:

994KM: [很粗暴].

(とても荒っぽい)

995J: (h)(h)(h)(h).

→996K: 怖かったって. とつ、幸い(), 私()がいたから.

997J: (h)(h)(h)(h).

985までJは談話に参加してこない。そこでKが、通訳の必要があると判断したのでであろう。986KからKMの発話を日本語に訳していく。逐次通訳とはいえないが、KMの言っていることのみを訳しているKの発話は、プリンシパルであるKMのアニメーターとしての役割のみを果たしている。996Kの「怖かったっ

て」の「って」は伝聞であり、それがKの言葉ではないことを示すマーカーである。ただ、996後半の「私」とはKであり、後半は伝聞ではなくKの言葉であることがわかるが、このケースについては後述する。同じく、インドネシア語に通訳する場合も伝聞マーカーを使用している。

(13) 両親宅

<<KMの年を聞いて、Jは若く見えることに驚く>>

421J: ()Kenapa (どうして—)

[しわがない]

422KM: [Sudah *oldest*.] (もう年よ)

→423K: Kenapa nggak ada kulutan? Katanya.
(「どうしてしわがないの?」だって)

423Kの発話は421JのKMに向けられた発話の通訳である。‘Katanya’ というのは「～と言っている」という伝聞のマーカーである。

7-1-2 非明示的な通訳

媒介者がコミュニケーションをスムーズに行うために存在するのならば、7-1-1のように話し手の言ったとおりに一つ一つ訳す必要がない場合もある。

(14) 両親宅 <<Jから日本のお土産をもらったKM>>

474KM: [舌打ち] 日本的什么东西都奇奇怪怪的
(日本のものは何でもおかしい)

475K: [Ya : Ah ha.]
(うん、そう)

476J: ん : : .

→477K: 珍しい。

478J: Tapi ya : () enak juga. Kaya まあ、あられとか。()
(でも、そうおいしいよ。あれみたい、—)

[好き () でしょ?]

479K: [Ya : : : .] 好き。 (うん—)

480J: [前、食べられたっていつ] たから

481K: [Ya : : : : あられ好き] (うん—)

482J: 種類は同じ。あられですから。

Jは土産に日本のあられを持って行った。ここでは包みはまだ開けられておらず、「お菓子がインドネシアのkerupuk(煎餅)のようなものだから若干の日持ちはする」という話をしていたところである。477Kは、474KMを通訳したものと思われる。476Jのあいづちが曖昧なものだったために、通訳したほうがいいと判断した、つまりKがJの言語能力を見積もったのであろう。しかし、全文を訳したのではなくニュアンスだけを意識している。受け手であるJが477Kの発話はK自身のことばではなくKMのことばのアニメーターであるということを知るには、知識のスキーマ (knowledge schema: Tannen & Wallat 1993) が必要である。JはKが日本のお菓子がとても好きだということを既知に知っていたし、お土産をKMに渡す前には、JとKが包みを見ながら日本のお菓子についてひとしきり話したという経験もあった。それでJも、「珍しがっている」のはあくまでもKMであると察して話を進めている。従って、このように参加者がそれぞれ談話の文脈に対する知識のスキーマがある場合は、通訳者も必ずしも全文訳す必要がないことがわかる。媒介者Kの意識は文脈化の手がかりとなることで十分なのである。

7-2 立場設定のシフト

—アニメーターからオーサーへ—

プリンシパル(トークへの責任者)である前話し手のアニメーターであるはずの通訳者だが、黒子に徹しきれず自らもオーサー(トークを創造する者)にシフトするケースもある。

7-2-1 話し手の立場で

(15) <(12)の一部再掲>

両親宅 <<KMが日本に行ったときの入国審査時の話をしている>>

992KM: 不客气 (失礼だし)

993K: 怖い [怖い] 顔もしてるから : .

994KM: [很粗暴] (とても荒っぽい)

995J: (h)(h)(h)(h).

→996K: 怖かったって。とつ、幸い(), 私() がいたから。

997J: (h)(h)(h)(h).

996Kの「怖かったって」は、伝聞マーカーを使いKのことばではないことが明らかにされている。しかし、その後の「とつ、幸い、私がいたから」は、KMのことばではない。この「私」とはKである。この話題は、日本留学中だったKを訪ねてKMが日本へ行ったときのエピソードなので、Kもその状況を知っているのである。そこでKは自分が知っている情報について、アニメーターとして得たターンを利用してプリンシパルとなり、自らオーサーとしてことばを選び発している。通訳者だったはずのKが突然、自らのことばで語りだす者へと立場設定のシフトが起こっていることがわかる。

7-2-2 受け手の立場で

(16) <一部(13)を含む>

両親宅 <<KMの年を聞いたJは、KMが若く見えることに驚く>>

421J: (.)Kenapa [しわがない.] (どうして—)

422KM: [Sudah oldest.] (もう年よ)

→423K: Kenapa nggak ada kulutan? Katanya.

(どうしてしわがないの? だって)

424J: Estheya? (エステですか?)

425KM: No! (いいえ!)

426J: [massage?] (マッサージ?)

427KM: [Mami 用] 日本的嘛!

(ママは、日本製を使ってるのよ!)

→428K: Oh [: : :] (おお)

429KM: [(xxxxx)] 日本的 (xxx 日本の)

→430K: 日本の化粧品を使っているから。

431J: Oh! Shiseido {資生堂}。

432KM: Y : : a! (そうよ!)

433K: (h)(h)(h)(h)(h).

7-1-1で触れたように、421Jの発話を423Kがインドネシア語に通訳する。それに対する直接の返答が427KMである。そして、その427KMに対して428Kが「おお」と反応している。429KMがもう一度繰り返したところで、430Kが日本語に通訳する。Kは話し手KMと受け手Jとのやりとりの仲介役という立場

設定だったはずが、428Kは、受け手として反応してしまっていることで媒介者ではなくなっている。しかし一旦仲介役を離れたかにみえたKは、430でまた、427KMのアニメーターにシフトしている。

両親宅の談話でのKは、通訳者である上に、Kの両親とJの双方を最もよく知る人物としてことばの媒介者でもあり、人間関係の媒介者でもある。いわばこのイベントでの中心人物でもあり、立場設定を頻繁に換えながら、談話に参加しているのがわかる。

7-3 他者による言い直し

5-1-1の言い直しでは、現話し手自身が内容をよりはっきりと確認するためにCSによって言い直したり、受け手が同意を自分のことばで表明するためにCSが起こったりすることが明らかになった。本項は、あくまでも媒介者として前話し手の発話を言い直すケースを分析する。

7-3-1 媒介役としてのターンの受け渡し

Kは日本語が理解できJと親しい関係なので、家族とJとを取り持つ中心的な役割を担っている。時には通訳を行い、時には自分の知る情報を補足しながら常に談話の中心者でいる。しかし次の例は、いずれもCSは起きているが、通訳ではない。2例とも新しい話題の開始部分である。

(17) 両親宅 <<Jの二人の妹について。下の妹 (三番目) は独立しているという話のあとで>>

545KM: 还有第二个呢? (二番目はまだいるの?)

→546K: 第二ada, Jちゃん? (二番目はいる、Jちゃん?)

547J: Ada ↑(.) tapi [belum-] (います。でもまだ—)

548KM: [教书?] (教師してるの?)

(18) 両親宅 <<日本では、息子が生まれなくて娘ばかりでもいいのかとKMが尋ねている>>

674KM: Kenapa° 在日本三个女儿, 不会受再想生一个男的, 为什么?

(どうして日本では、3人とも娘でももう一人男の子を産もうとしないの、どうして?)

→675K: どうして?

676J: ん?

677K: あの:、日本人は、どうして3人とも娘だったら↑()もう一人男の子

546Kも675Kも通訳にしては不完全である。546Kはマンダリンとインドネシア語が混在した文であり、675Kは、674KMの発話のうち、Jにも理解できるインドネシア語の‘Kenapa’の部分だけを日本語にしているため、通訳の役割は果たしていない。Kは自分が知っているJの情報に関しては、Jが答える前に自分が答えてしまうことしばしば見られるのだが、この2例は恐らくKも知らないJの情報なのだろう。従って、自分は答えず、「この話題はあなたに向けられている。私は返答しない」ということを示すために、CSで話者交替のターンをJに振る役割を果たしているのではないか。6-1で受け手を指定するためにCSが起るケースについて分析したが、本項のCSでは、次話者として選択されたことを喚起させることのみを目的としているのではないか。

中田(1992)は、「発話量が増せば会話は賑やかになる。仮に自分から話す内容がなくてもあいづちを打つなど、とにかく会話に参加することで、話者は誠意を示すことができる(284)」と述べ、繰り返しの交話的機能として「会話への参加・寄与」をあげている。

媒介者Kが通訳でもなくKMの発話を繰り返すことは、Kの「会話への参加・寄与」といえるだろう。CSによって受け手を喚起させるために、媒介役として談話に貢献をしているのだ。

7-3-2 定式化 (formulating)

定式化とは、「情報提供者のこれまでの話を要約したり、別な言葉で置き換えたり、要点をさらに展開させたりする作業である」(Heritage 1985;好井1999)とあり、本研究では特に「これまでのやりとりを要約する。まとめる」ことを定式化として扱う。定式化が起る前のやりとりでは必ず繰り返しが起っている。また定式化自体も、それまでの発話の繰り返しでもある。しかし、ここでの繰り返しはやはり、繰り返すこ

とでこれまでの話をまとめる役割を果たしているということに重点をおきたい。

(19)両親宅 <<KMがJの両親について尋ねたあとJの兄弟の話に移っていく>>

514KM: Oh. ° 六十三° (1)孩子(J), 还有呢?

(お—63. 子供は、Jと、まだいるの?)

515J: ()Ada° 妹妹nya() dua.° (いる。妹が二人)

516KM:° 妹妹(dua).° ,三个女儿。(妹が二人。娘3人)

517K: N[nn.] (うん)

518J: [Nnn.] (うん)

519KM: Nnn()Ada boy? (うん、男の子はいるの?)

520K: [Nggak ada.] (いない)

521J: [Boy?Nggak] ada. (男の子?いない)

→522K: ° Perumpuan semuanya. tiga-tiganya.°

(全部女。3人とも)

523KM: Semua begini ya

(全部こんな[Jみたい]なんだ)

524J: Nggak.(h)(h)(h). (いいや)

KMが尋ねることにJとKが答えてきたそれまでのバラバラとした内容を、522Kが一旦整理しまとめている。その後523KMで、「皆こんな(タイプ)なの」と話は次へ発展していつていることから522Kがまとめ役としての役割を果たしているのがわかる。やりとりをまとめる、すなわち定式化は、収集データ中、KMがマンダリンで行った一箇所を除いて、全て参与者の共通語で行われている。日本語での定式化もあったが、それはKとJの二人だけの場面でのやり取りであり、日本語で行われていた談話であった。

定式化の際に改めてインドネシア語がコードとして選択されていること、またCSが起こった定式化によりある参与者がその状況におけるまとめ役を担ったことで、その参与者は、参与者としての存在を不動のものにしていくということが考えられる。特にこのイベントでのKはアニメーターであることが多く、自分のことが話題に上っていないので、前項の繰り返しの続き、定式化を行うことでもリスナーシップの表明、参与を表明しているともいえる。吉川(2001)は、「発話

の要約という定式化は、先の発話者のプリンシパルを受け継いで代弁することを意味する。しかし、他者の発話の要点を解釈したり表現形式を洗練したりする行為には、オーサー自身の解釈方法や表現の好みなどが影響するはずである。つまり、そこには定式化を行う話し手の信条が入り込む可能性があるといえる(192)」としている。つまり、Kが定式化を行うのは、単なる代弁ではなくK自身のことばでもあり、定式化を繰り返すことによってKは、談話内のイニシアティブを持ち続けられ中心人物であり続けられるともいえるのではないか。

8 おわりに

本研究ではインドネシア華人の家族の日常の談話を取りあげ、CSがどのように起こり、それが話題や参与者の位置づけをどう変えるものなのかを相互作用の社会言語学の枠組を中心に分析した。筆者は多言語社会というものはバイリンガル、トライリンガルだけのためのものではなく、言語能力の如何に関わらずある2つ以上の言語が使用されている場であることだけで多言語社会であると考え。従って、そこでの参与者それぞれの会話のスタイル、CSのスタイルは、どんなスタイルであってもその一つ一つが認められる行為なのだと考えており、それをインドネシア華人の談話からも実証したいと考えた。そして、コードを操る参与者に注目することで、言語能力や母語にばらつきのあるインドネシア華人の談話でのCSの様相が明らかになるのではないかと考えた。

そこで分析では、談話内の立場設定やコミュニケーションをスムーズにするための参与者のふるまいによって分類した。

まず、話し手から他の参与者へ行う気配りや手助けなどを「配慮(consideration)」とし、CSとの関わりを分析した。その結果、参与者は言語能力を見積もるために繰り返しを行うだけでなく、相手との心的距離を調整するために使用言語を選択する場合があることがわかった。また話題を転換する際には、フィラーなどがなくともコードを切り換えることでスムーズに話

題が転換されることも明らかになった。そのほか、参与者全体への仲間意識を呈示するものとして、参与者たちの使用言語をミックスした造語を使用するケースが見られた。

次に、ターンテイキングシステムから談話の連鎖とCSを捕らえようと試みた。分析の結果、先行研究にも見られるようなCSによって受け手をシフトさせることができるという結果だけでなく、CSによって偶発的に受け手がシフトし、それで談話展開がはじめの流れと変わっていく様が見られた。また、ターンテイキングに違反してターンを獲得しようとする行為を、Goffman の従属的コミュニケーションとコードを関連付けて分析した結果、CSはその発話を有標化し、比較的容易にターンが獲得できたり、主たる流れを邪魔せず自分の言いたいことを言い進めることができることもわかった。

そして最後に、媒介者としてどのように談話に参加し、コードを切り換えるかを分析した。まず、受け手から要請されなくとも、媒介者が受け手の言語能力を見積もって随時通訳を行う様子が明らかになった。その際も、伝聞マーカを用いてアニメーターであることを明示する場合のほかに、文脈化の手がかりとして非明示的に行う場合もある。また、媒介者としての立場設定からオーサーにシフトしたり、媒介者であったはずが受け手として反応してしまったり、媒介者も常に媒介者であり続けるのではなく、立場設定が頻繁に変わっているのがわかった。そして、通訳ではなくコードを切り換えて繰り返すことで、媒介者が話し手の受け手とはならないことを明示したり、これまでのやりとりをまとめる定式化を行うのも媒介者としての参与の仕方であることが明らかになった。これらは、繰り返すことでリスナーシップを表明したり、会話に貢献したりするという働きもあり、媒介者が談話内での立場を保ちつづけるのに必要な戦略であるともいえる。

このような結果から、先行研究(Li Wei 1998)でいわれているように、CSが発話の解釈に何らかの示唆を与えるサインであることがわかる部分もあるが、やはりCSは、参与者と参与者の意味の交渉ではなくて、

Goffman(1981)のいうように立場設定の交渉なのだと考える。参加者が談話にどのように参加するかの表れのひとつがCSである。公的な場ではある言語を使い、私的な場では別の言語を使うといった常にきれいな二分(Blom & Gumperz 1972)になるとは限らず、従属コミュニケーションでは必ずこのコードを使うといったように、コミュニティの中で言語使用の共通のパターンがあるとも言い切れない。参加者とのコミュニケーションを潤滑に進めるために、ある時は相手が理解していないことを悟り別のコードで同じことを繰り返し、ある時はやりとりには加わっていない参加者の存在を認識していることを示すためにその参加者の母語を選択し、その時その時の文脈と相互作用に応じてコードを選択している。それも、その一人一人の参加者の言語能力や好みや育った言語環境によっても様々である。コミュニティメンバーが皆、同じ文脈で同じコードを選択するとは限らないのである。

つまり、参加者に注目してCSを分析した結果、コードを切り換える「場」というのは、常に公私や話題などの背景的要素のみで予め決められているのではなく、「いま、ここ」での相互作用で構築される文脈と参加者の要素によっても、その都度変化するものだといえることがわかった。本研究は、CSが普遍的なもの、またはある多言語コミュニティのメンバーに共通するものであるとはいえない面を示すために行った。インドネシア華人の言語環境が一様でなくCSも多様であることが、談話外の参加者の背景的要素も解釈に取り込んで相互作用の社会言語学の枠組で分析したことで実証されたのではないだろうか。

CS研究も「言語」や「社会的意味」だけではなく、根本にある「参加者」を軸とした総合的な談話構造研究として取り組むことが、ますます複雑化していく言語社会を検証するために必要なこととなっていくのではないかと考える。そのために、参加者を軸においた談話研究を進めていくべく、更にサンプルを増やす、他の地域も対象にすることの必要性を感じる。

また、インドネシア華人研究という分野においても、まだまだ取り組むべきところが多くある。マンダリンや中国地方語を第一言語とする世代が高齢化していく

中で、マンダリン教育が再び解禁されたインドネシアでの華人の親や祖父母世代は、子、孫世代の言語を含めた教育に非常に興味を持っている。次世代を担う現在の十代以下のインドネシア華人たち。彼らの言語が今後どうなっていくのか、そしてそれに伴い民族的アイデンティティは変化していくのであろうか。今後に向けて非常に興味のあるところである。

注

1. 華僑と華人の定義についてはさまざまであるが、ここでは唐(1993)の「華僑が当該居住国の国籍を取得し、なおかつ中華民族としてのソーシャル・カルチュラル・アイデンティティを失わない場合、そうした人々を華人と呼ぶ」という定義に従い、「華人」という用語を使用する。
2. 中国大陆で *普通話*、台湾では *國語* と呼ばれているものを指し、インドネシア華人は *國語* と言ったり、*汉语* *中文* といったりするが、ここでは「マンダリン」ということにする。
3. ジャワ語、スンダ語、バリ語などの民族固有の言語を指す。
4. 祖先の出身地域の言語。主に福建語や広東語、客家語、潮州語など。以後、同様に使用する。
5. 本研究ではマンダリンと中国地方語の総称として「中国語」ということにする。
6. Garfinkelを中心とする社会学の一派。
7. 以下協力者は全て仮名。
8. Schiffrin(1993:242,1994:119)で、談話の参加者が話し手の発話に対してすぐ意図を自己解釈し、結論付けようとしていることに「assessment」という用語を使っている。ここではそれを受け、話し手が相手の言語能力を状況から解釈、判断することを「見積もり(assessment)」とした。
9. 網掛けは特にポイントとなる箇所をわかりやすく示すために、必要に応じて用いることにする。
10. mami,papiは、mommy,daddyの意味のオランダ語からの外来語である(Dede Oetomo 1984)。
11. 「舌打ちの音」は、日本で多くなされるように、思い通りにならないときや苛立ちをあらわす時ばかり

りではなく、感嘆を表現する際にも使われる。その場合は小さく続けて何度か鳴らす。

12. 会話分析での概念。質問－返答、依頼－承諾/拒否、招待－受諾などの隣り合った発話のペア。
13. 隣接対において、例えば依頼が承諾されるのは好ましい応答であり、拒否されるのは好ましくない応答である。(12,13ともLevinson 1983;訳1990より)
14. インドネシアにもともと住んでいる原住民のことを一般に称する。
15. ほぼ全員女性である。庭仕事や主人の仕事を手伝うために男性の使用人が雇われている場合もある。
16. それに対して、承認された参与者と、承認されていないが話し手に存在が知られている受け手 (bystander) のコミュニケーションの場合はクロスプレイ(crossplay)、bystander同士の場合はサイドプレイ(sideplay)という。
17. Dewan Perwakilan Rakyatの略で国民代表議会、つまり国会のこと。

参考文献

- 串田秀也(1988)「「フレーム」と「関与」－相互作用分析における「コンテキスト」の問題へのゴフマンの視角－」『ソシオロジ』第33巻2号No.103社会学研究会,p.3-20.
- 貞好康志(2000)「スハルト体制末期インドネシアの『華人』カテゴリーをめぐる諸相－中部ジャワ・スマランでの調査より－」『国際文化学』第2号神戸大学国際文化学会,p.19-34.
- ザトラウスキー・ポリ－(1994)「インターアクションの社会言語学」『日本語学』13 (10)明治書院,p.40-51.
- 白石隆(1996)『新版インドネシア』NTT出版.
- 津田葵(1989)「社会言語学」太田朗編『英語学大系第6巻：英語学の関連分野』大修館,p.365-497.
- 唐松章(1993)『インドネシア華人社会経済論－その社会・経済的地位の変容に関する研究－』鳳書房.
- 中田智子(1992)「会話の方策としての繰り返し」『国立国語研究所報告104研究報告集13』p. 267-302.

西阪仰(1995)「会話をフィールドにした男－サックスのアイディア」『月刊言語』24大修館,p.7-12.

西阪仰(1997)『相互行為分析と言う視点－文化と心の社会学的記述－』金子書房.

西阪仰(1999)「会話分析の練習－相互行為の資源としての言いよどみ－」好井裕明・山田富秋・西阪仰『会話分析への招待』世界思想社,p.71-100.

松尾慎(2003)『インドネシア華人社会における言語シフトと言語選択』大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文.

山田富秋(1999)「会話分析を始めよう」好井裕明・山田富秋・西阪仰『会話分析への招待』世界思想社,p.1-35.

好井裕(1999)「制度的状況の会話分析」好井裕明・山田富秋・西阪仰『会話分析への招待』世界思想社,p.36-70.

吉川友子(2001)「「異文化間交流」の実際－滞日留学生と日本人の相互行為分析から－」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い 批判的社会言語学の試み』三元社,p.183-214.

Auer,P.(1988) A conversational analytic approach to code-switching and transfer. In Heller, M (ed) *Codeswitching Anthropological and Sociolinguistic Perspectives*. Berlin : Mouton de Gruyter, p.187-213.

Blom,J.P.&Gumperz,J.(1972) Social Meaning in Linguistic Structures: Code-Switching in Norway.

In Gumperz,J.& Hymes,D.(ed). *Direction in Sociolinguistics. The Ethnography of Communication*. New York: Holt, Rinehart and Winston, p.407-434.

Dede Oetomo.(1984) *The Chinese of Pasuruan:A Study of Language and Identity in a Minority community in Transition*. A Thesis Presented to the Faculty of Graduated School of Cornell

- University in Partial Fulfillment of the Requirement for the degree of Doctor of Philosophy.
- Goffman, E. (1967) *Interactional Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, New York: Doubleday Anchor. (広瀬英彦/安江孝司訳(1986)『儀礼としての相互行為 対面行動の社会学』法政大学出版局)
- Goffman, E. (1974) *Frame Analysis*. Boston: Northeastern University Press.
- Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gumperz, J. J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. (1985) Analyzing News Interviews: Aspects of the Production of Talk for an Overhearing Audience. In Van Dijk (ed.) *Handbook of Discourse Analysis Volume 3 Discourse and Dialogue*. London: Academic Press, p.95-117.
- Johnstone, B. (2002) *Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子訳(1990)『英語語用論』研究社出版)
- Li Wei. (1994) *Three Generations, Two Languages, One Family*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Li Wei. (1998) The 'Why' and 'How' questions in the analysis of conversational code-switching. In Auer, P. (ed) *Code-Switching in Conversation*. New York: Routledge, p.156-176.
- Myers-Scotton, C. (1993) *Social Motivation for Codeswitching*. Oxford: Oxford University Press.
- Sacks, H. Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4), p.696-735.
- Schiffrin, D. (1993) Speaking for Another in Sociolinguistic Interviews: Alignments, Identities, and Frames. In Tannen, D (ed) *Framing in Discourse*. Oxford: Oxford University Press, p.231-263.
- Schiffrin, D. (1994) *Approaches to Discourse*. Oxford: Blackwell.
- Tannen, D. (1989) *Talking Voices*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, D and Wallat, C. (1993). Interactive Frames and Knowledge Schemas in Interaction: Examples from a Medical Examination / Interview. In Tannen, D. (ed) *Framing in Discourse*. Oxford: Oxford University Press, p.57-76.
- 資料 文字化の方法
- <言語の表記方法>
- アルファベット:インドネシア語
- アルファベットの斜体:英語・中国地方語
- 漢字の斜体:マンダリン
- * 日本語訳は行の右側にゴシック体で。発話が日本語の部分には訳をつけないでーであらわす。
- <文字化の方法>
- [前の発話との重なりの始まり
-] 重なりの終わり
- = 行間に隙間がなく続いている
- (1) ポーズまたは沈黙 () 内は秒数
- (.) ごく短いポーズまたは沈黙
- : 長く伸ばされた音
- 中断された発話
- . 下降イントネーション
- ? 上昇イントネーション
- ↑ ↓ 記号直後におけるピッチ変化
- 下線 特に音量が大きい
- ° 音° 音量が小さい
- £ 笑みを含んだ発話
- ! 活発な調子

・hhh 息を吸う音

hhh 息を吐く音

(h) 笑いなどの息

(あ) 聞き取りにくく不確かな発話

(x) 書き起こし不能な発話

{ } 非言語情報

<< >> 文脈の説明

→ 特に注目する発話